

# ひらく

●一点を支点としてひらく●窓・扉をひらく●道をひらく●口・目をひらく●花がひらく●運をひらく●文化をひらく●インターネットをひらく●新聞・本をひらく●講座・会をひらく

—— 未来をひらく、心をひらく ——

2016.10

特集

多様な生き方ができるまち

39

男女共同参画社会をめざす

# 特集

## 多様な生き方ができるまち

平成28年版『男女共同参画白書』

(内閣府)には、「男女が共に、仕事か家庭生活か、いずれか一方を優先せざるを得ない状況を見直し、個人の様々な状況に応じて多様に生き方を選ぶことができるようにする必要がある。」と書かれています。

私たちが暮らす小平のまちを見ると、自分の置かれた状況に応じて素敵な生き方をされている方がいらっやいます。お訪ねして、お話をうかがって来ました。

### 家族での「良い」を築く

パン・料理教室「ワツカトリエ」

松田寛子さん

パン・料理教室でもあるご自宅を訪ねると、よい香りが漂っていました。山梨県産のルバーブと小平市産のブルーベリーでクランブルを作り、出迎えてくださったのです。今は人気のワツカトリエですが、その経緯をうかがうと、簡単なことではなかったようです。

製薬会社に勤務していた頃の松田さんは、200人を前にしたプレゼン、出張、1日3食外食も珍しくない忙しい毎日を送られていました。やりがいを感じ、結婚しても仕事を続けるつもりでしたが当時の会社は男社会、産休が取りにくいこともあり、妊娠を機に退職を余儀なくされました。

家庭に入り、話す人がいなくなる



と松田さんは、精神的に追い詰められ、料理上手なお義母さんの料理もプレッシャーに感じ、食事を作るのが怖くなったと言います。そんなとき、せめて食卓を笑顔にしたいと始めたのがパン教室に通うことでした。

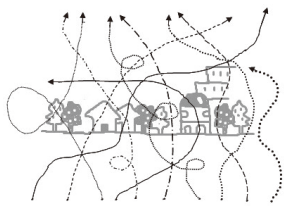
家で焼いたパンを夫が「おいしい」と食べてくれたときは、とてもうれしかったと目を輝かせる松田さん。やがて、オーガニック店やマルシェなどから出店依頼が相次ぎ、パングくりが松田さんの仕事になりました。

「赤ちゃんを連れて、今、やらなくともいいのでは？」と周囲から反對されましたが、気持ちは揺るぎませんでした。ただ、「主張をぶつけ

るだけでは何も解決しない。違うなら、すり合わせていけばいい」と気づき、周囲への対応を変えたそうです。

それがよかったのか、寝る間も惜しんで精進する松田さんを見る夫の態度が少しずつ変化し始めたそうです。2人目の息子さんを妊娠したときは、出産後6か月で仕事に復帰しました。自分の店を持つことが当初の夢でしたが、今の生活スタイルに合った働き方を家族で話し合い、自宅に工房を持ちながら、教室を開催することからスタートしました。

「社会が良いとするものでなく、家族が良いとするものを築いていくのが大切」という松田さんのお話をうかがっていて、家族から始まり社会全体に広がれば男女共同参画も広がる、と感じました。(A)



## 社会とのつながりを広げる

小平はぐくみプロジェクト代表

### 橋本直子さん

小平市に引っ越して来て17年、橋本直子さんの子育ては小平市で始まりました。子育てには地域の子育て情報と悩みを共有できるママ友が必須です。そこで、2001年に作ったのが「子育てネットサークル、らのおんキッズ」です。

サークルのホームページをつくり、メーリング・リストを開設したところ、あつと言う間にサークルのメンバーは延べ300名ほどになったといいます。これは、慣れない土地で孤独な子育てをしているママが予想以上に多いというこの現れでした。

「人の役に立ちたい」、「いいと思うことを人と共有したい」という気持ちが強くなった橋本さん、アロマセラピーで気持ちをリフレッシュする「保育つきアロマセラピー講座」を始めます。この講座は好評で、橋本さんのアロマセラピストになりましたという夢がふくらむことになりました。息子さん小学校に入学すると同時に、セラピストの学校に通い始

め、次の年には資格を取り、自宅でアロマセラピーのサロンをオープンすることになりました。

2013年、橋本さんは「コミュニティ・ビジネス起業講座」を受講。次の大きな一歩を踏み出すことになりました。

講座で「地域の課題」として橋本さんが考えたのは「産後うつ」でした。現在、出産女性の10人に1人が産後にうつ病を発症すると言われています。悩んでいるママ友から相談されたときに対応できなかった経験から、「産後サポート」や「母親の心とからだの健康」に役立つヨガ、セルフ・ケアなどの講座をプラスした産前産後のママの心と体を癒やす「はぐくみプロジェクト」を考え、プレゼンしたのです。すると、聞いていた人たちが共鳴して、講座の最終日に「小平はぐくみプロジェクト」を立ち上げることになりました。

このプロジェクトでは、子育てをする母親が孤立しないように地域が応援する必要があると考え、「こだはぐ子育て応援カード」を作りました。このカードを持っていて母親は、プロジェクトに協賛している団体や商店から特典を受けられ、地域とのつながりや地域のサポートを体験できるのです。現在、このカードは

1万8000枚、発行されています。

「小平はぐくみプロジェクト」では他に、毎月1回、鈴木公民館で「こだはぐカフェ」を開催し、子連れで母親が気軽に立ち寄り、ママ友と交流できる場を提供しています。6月に「父親学級」を開催しましたが、今後は、「孫育て講座」など祖父母が産前産後の母親をサポートするための知識を学ぶ講座を開催する予定です。

子育てのために仕事を辞め、専業主婦になった女性が社会とつながっていたいと思うのは普通のことです。子育てが一段落した次のステップで再就職という女性も数多くいます。橋本さんのように、日常生活からヒントを見つけ、社会とつながる活動を広げていくのも新しいライフスタイルではないでしょうか。橋本さんは、このプロジェクトのこれから目を輝かせていました。橋本さんへの期待もふくらみます。(N)



## ライオンの

### 社会にも

#### 男女共同

#### 参画?



NHK『ターウィンが来た! 生きもの新伝説』より

ケニアのツァボ国立公園に暮らしているライオンのオスには鬣(たてがみ)がほとんどありません。原因は暑さと湿度で、鬣が持つ本来の役目、保温がライオンたちにとって邪魔になったようです。「進化」と言ってもいい現象ですが、この進化、見た目だけではなく、ツァボのライオン社会を大きく変えたようです。

普通、ライオン社会では、狩りをするのはメス。オスはメスが狩り取った獲物を食べるだけです。ところが、このツァボのオスは、メスと協力して狩りもします。水も獲物も少ない環境では腹を満たすためにみんなが協力しないといけないことを学んだのでしょうか。

ツァボのライオンの仲間にはメスだけでなく若いオスも数匹いることがあります。これもライオンの社会では珍しいことですが、鬣のないオスは子育てにも参加するそうです。

生きていくために男も女も、これまでの習慣にとらわれず行動する。いち早く男女共同参画をものにしたライオンの生き方も多様です。(S)

## みんなが

### 主役になれるスペース

カフェ・ギャラリー たまゆら

### 佐古 不二子さん

玉川上水にかかる東小川橋近く、住宅街の中にカフェ・ギャラリー「たまゆら」があります。オーナーの佐古不二子さんは、長年続けていた仕事を終え、娘さんの子育て応援も一段落したとき、自宅でギャラリーを開くことを決意。気軽に人が集まれて、いろんなことを発信できる場にしたと考えました。

「たまゆら」と書かれた小さな看板を見つけたお客さんがドアのベルを鳴らしてやってきます。そんなお客さんの胸元にちよつと変わったアクリルセサリーを見つけると、「それ、素敵ね、手作りかしら。あなたの作品をここで発表しません？」と、声を掛けます。こんな何気ない会話がきっかけで、世界に一つしかないアクリルセサリーの展示と販売が始まりました。

カメラを肩に入ってきた人には、「どんな写真を撮ってらっしゃるのかしら」の一声から、その人が撮ってきた写真を見せてもらい、写真展を開催することになりました。多く



の人が写真を見に来られて、さつそくファンもできたそうです。

趣味でも、長い時間かけてコツコツと取り組んできた人の作品には、必ず見る人に伝わるものがあり、心を動かす力があるそうです。作品を見て、良いなあと思うってくれるファンができる、それが力となり、きっかけとなって、作る人に自覚と自信が生まれ、創作意欲も刺激され、どんどん変わっていきます。

「たまゆらに集う人が自己実現に向かって変わっていく姿を見ると、本当にワクワクします。このワクワク感がたまらないですよ」と話す佐古さん。

子どもの頃から職人の仕事を見るのが大好きで、モノを作り出す人に大きな関心と尊敬の念を持っていたそうです。その心で今、引っ込み思案の作り手たちに「たまゆら」というステージを提供し、「作家さん」と呼んで応援しているのです。

陶芸、着物のリメイク、絵画、蔓籠、バッグ、帽子、洋服、鎌倉彫など30人以上の作家さん達が「たまゆら」とつながり、活動の場を広げています。

「たまゆら」がそんな素敵なお手紙であるなら、佐古さんは、誰もが主役になれることを教えてくれる名プロデューサーと言えるでしょう。

(さ)

## 恩返しのもりで

### 若者の音楽を支える

未来屋 店主

### 藤本祐一さん



きだったそうです。

しかし、29歳のときに父親の病気で実家に戻ったため、音楽の仕事が減少してしまい、学生時代のアルバイト経験をいかして小平市で楽器販売を始めました。ギターなど1970年代の楽器は、今は手に入らない良質の木材を使用して、手間をかけて製作した価値のあるものなので、藤本さんはリサイクルして販売しています。

その一方で、小平市に20年以上住んでいる藤本さんは知人も多く、「ルネこだいら」で毎年開催されている青少年音楽祭の音響調整などを15年以上もボランティアでされているそうです。

未来屋で楽器を買ってくれた高校生が演奏すると聞くと、応援を惜しみません。文化祭で演奏する時に足りない楽器や器材を貸し出したり、ギターの弾き方を教えたりしています。

他に、未来屋祭り、ミュージックアイランド小平、ギター発表会などで、お客さんと一緒にギターの演奏

青森県の弘前市からミュージシャンを目指して上京し、すぐに作曲とギターの演奏を認められて六本木などで活躍していた藤本祐一さん。23歳で結婚した後、安定した生活のために広告デザイナーになったのですが、大手音楽会社のプロデューサーから声をかけられ、スタジオ・ミュージシャンになり、音楽大学の先生から音楽理論も学びました。自分が表舞台に立って有名になるより、裏でプロデュースするほうが好

